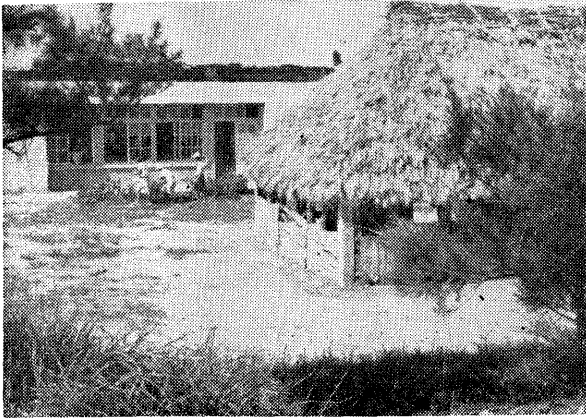


沖繩の幼児教育

—〈1〉—

村山貞雄



(琉球の校舎・併存する新旧両校舎)

一 まえがき

沖繩の教育について筆者は、「六論衍義」をあらわした程順則が琉球の人であることや、久米村に明倫堂があったことぐらいしか知らなかった。

ところが、このたび沖繩に四十日あまり滞在することができたので、沖繩の教育について、少し知ることができた。筆者は、最初の二週間ほどは沖繩の教育史についての書物を読み、それ以後那覇市を中心として、教育者、教育委員会、政府などのいろいろな人において、沖繩の教育事情を知りえた。沖繩の教育史の本格的な研究は、大体漢文の書物を読むことによっておこなわれる。沖繩の教育の現状は、沖繩のもつ特殊事情を中心に、対日本関係、対アメリカ関係などをしら

べてゆくところに、微妙な教育思潮をつかみえよう。

つぎに、これらのささやかな智識から、沖繩の幼児教育について述べることにしよう。

二 沖繩の幼児教育の基底

沖繩の幼児教育をみるために、まず沖繩の教育全般のすがたをながめてみよう。

沖繩の教育は明治十二年を境として二つに分けることができる。すなわち、明治五年にわが国で廃藩置県がおこなわれたのにしたがって、琉球県がおかれ、明治十二年に沖繩県と改称されたが、これより近代教育制度時代になるので、この時期をもって、大きく二大別できる。

廃藩置県以前 廃藩置県以前は、東北に日本、西に支那、南に西南の諸国をひかえた小島をもって、いかに実質的な独立をたもってゆくかということと、この地の利をいかに利用するかということに全力がそそがれた。

その結果、支那、日本および南方の文化が移入され、教育面に種々の影響をあたえた。特に沖繩本島においては日本の文化の影響が大きかった。

たとえば、料理を一つ眺めても、沖縄の料理は豚肉を主材料とした支那風の料理がほとんどであるが、これにデリケートなわびやさびなど色彩その他のいろいろな感覚をいれてくればあい、ほとんど日本のなものを利用している。しかも、これらを沖縄料理として独特なものにしようとするところに沖縄人の自主的な気持ちがかがわれる。教育も大体この調でおこなわれていたと思えばまちがいない。

社会制度は、王族や士族と平民の別が次第に明瞭になったが、最下位にある平民の教育はきわめて低く、幼児教育にはみるべきものがない。

日本においては、近世中期以後、庶民の下位にあった商人の実力がましてき、そこに、庶民教育や幼児教育で注目すべきものがあらわれてきたのであるが、沖縄では薩摩藩の圧迫や政府の重税のために庶民の生活は非常に苦しく家庭教育は発達しなかった。ただ政治の方法が農民にきびしく商人にゆるやかであったために、那覇の商人達が次第に力を得るようになり、そこでは反省された幼児の家庭教育がおこなわれるようになった。

教育内容は、わが国と非常に似ている。す

なわち、平仮名による人名、野菜名、教条、六論衍義などの素読、算術（四則）、習字（和漢）和文の綴方、小学、三字経、四書・五経、古文の素読などがおこなわれた。思想的には、支那の孝を中心とした教えが強く影響しており、幼児期から孝についてのしつけがおこなわれたといわれている。沖縄の歌は相聞（恋）の調べと教訓歌で大部分が占められるが、教訓歌には、孝のたいせつなことをうたったものが多い。その例を示すと、つぎのようなものがあるが、この歌は沖縄の子どもなら誰でも知っているものである。

ほうせんか の 花 は 爪先
 テインサグ ヌ ハナ ヤ チミジャチ
 に 染めて 親 の 教えたこと は
 ニソミテ ウヤ ヌ ユシグト ヤ
 肝 ニ 染めなさい
 チム ニ 染めなさい

天 の 群星 は かぞえてみれば
 テイン ヌ ムリフシ ヤ ユミハ
 かぞえられぬことはない 親 の 教訓 は
 ユマリユイ ウヤ ヌ ユシグト ヌ
 かぞえることができるか
 ユミヤナユミ

夜 航海する 船
 ヌル ハラス フニ ヤ は 北極星
 目当て 私を うんだ ヤ は 我
 ミアテイ ワン ナチャル ウヤ ヤ ワンド
 目当て

家庭教育は、非常に封建的であり、幼児期から男児は女兒にくらべてすこぶる丁重に扱われた。すなわち男尊女卑の風が強かった。これは家をつく風俗からきている。（尤もふるい昔は母系制度のこともあった）しかし、この習慣は終戦後緩和され、筆者があらた沖縄の人人の主張によると、内地よりもいまは平等だろうということである。しかし、筆者のみたところでは男尊女卑は内地よりもはげしい。

ちなみに、沖縄では旧民法によっている。廢藩置県以後 廢藩置県は、実質的な独立国としてとどまろうとする王族や政府の反対と抵抗のうちにおこなわれたが、国民一般はむしろ政治の刷新をよるこんでおり、それ以後の知事による行政も大体円滑におこなわれ、教育は他府県に準じて発達した。

沖縄の最高学府は、県立の男女師範学校であり、ここを卒業した人人が、現在沖縄で教育界は勿論あらゆる方面で大いに活躍している。またそれ以外の教育をもとめる人人は、内地とともに台湾に行く者が多かった。現在台湾から引きあげてきて上層部で活躍している人が多く、また台湾にとどまっている人も

多い。台湾に多くの人人が行った理由の一つは、台湾において内地人として優遇されたことによる。このようなことから、日本人としての自覚がたかまったのであるが、特に強く反省されたのは、むしろ大東亜戦争から終戦後の現在にかけてである。

幼稚園は、那覇市やその他の都市に少し設立されていた。たとえば宮古島の例をとると、全島に約三十六の小学校があったが、幼稚園のあったのは、平町に一つだけである。

この幼稚園は、小学校に併設されたものであるが、補助がです私立幼稚園とおなじように経営されており、月謝をもってまかなわれていた。園長は、本校の小学校長がかねるのではなく、小学校長を退職したような人がなっていた。志願者は相当多く、四、五十名（本校の一年生が約二百名）ぐらいたった。

明治以後の沖縄の学校教育は、画一的な日本人としての教育がおこなれており、他府県とことなることはないが、方言にたいして標準語の普及が努力された。方言は、わたしたちには、きいていてもまったくわからないが、その多くは日本語が強くなまったものであり、「オ段」が「ウ段」に変わるなどの発音の

変化がみられる。この方言の問題が、幼稚園の存在価値をたかめるのであるが、これは後に述べよう。

終戦後　終戦後は、内地がアメリカ合衆国の教育制度を採用したのと同じいきさつで、沖縄もアメリカ合衆国の制度をとり入れ、学校教育は内地と同じようになっていく。

教育行政は米軍のもとにあり（現在民政府といっている）、さらに琉球政府（主席は沖縄の人を任命）に、文教局があって、教育行政をおこなっている。学校組織は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、特殊学校がある。大学は首里の景勝の地に琉球大学がある。また、特殊学校は盲聾学校等三校ある。なお昭和二十七年まで、小学校は初等学校、中学校は中等学校と呼ばれていた。そのためもあるのか、現在、人人は小学校を小学校、中学校を中校と略して呼ぶことが多く、また中学校をジュニア、高等学校をシニヤーと呼ぶことが多い。幼稚園の呼称は変わったことはない。

つぎに戦後の沖縄の教育のうち、幼稚園教育を考えるために参考となることを二、三述

べよう。

沖縄の教育制度　教育制度は、琉球政府に文教局があり、教育委員会制度を採用している。教育委員会は、中央教育委員会、連合教育委員会、高等学校連合教育委員会、区教育委員会があるが、幼稚園は小学校や中学校とともに、区教育委員会の管理下にある。この区教育委員会は六十四ある。（ただし地区は十二で、十二人の教育長が六十四の教育区を兼任しており、地区内各教育委員をもって連合教育委員会が構成されている）

たとえば那覇市の教育委員会をみると、五人で構成されており、（中央教育委員会は九名で構成されている）一人は市長がなり、また少なくとも一人は婦人でなければならぬ。これらの教育委員会は決定権をもっているが、執行は市長（その教育区市町村長）の責任においておこなわれる。したがって那覇市の小学校附設の幼稚園は、当然本校と同様に那覇市教育委員会の管理下にあるわけである。しかし、那覇市には、幼稚園関係の指導主事は一人もいない。このようなことが幼稚園軽視ととられ、後に述べるように幼稚園の先生が問題にするのである。

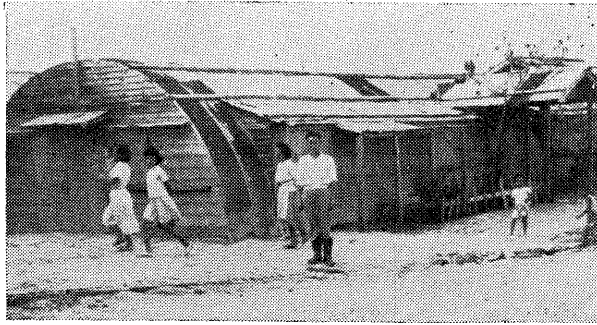
なお、教育長は中央教育委員会が選任することになっている。

教育財政 終戦後まったくの灰燼状態から立ち上がった沖縄の教育財政が困難をきわめたことはもとよりである。しかし、筆者のみるところでは振興は案外はやかたったといえる。約十年で、露天教室からカマボコ校舎↓かやぶき獨立小屋教室↓木造校舎↓ブロック建築と、次々に発達しており、一つの学校のなかに、これらの校舎が三種ぐらいならんで使われているのが普通である。(現在、煉瓦造百四十五教室、石造百九十二教室、木造千三百九十七教室、鉄筋ブロック千九百五十二教室ある)

戦後はじめのうちは、幼稚園から大学まで無月謝制を採用し、教科書も無償配給制とした。しかし、二十七年以後、義務教育のみ無月謝制(教科書は個人負担)となり、高校、大学は勿論、幼稚園も月謝をとることになった。現在文教局の予算は琉球政府予算の二十八・四一%を占めている。

なお、沖縄の教育財政で注目すべき問題として教育税がある。教育税とは、他の税と別に、教育のために設立された税である。教育

税は教育を重んじ、人人に教育を自覚させるという意味で興味のあるものであるが、沖縄においては実際にはたくみに運用されていない。すなわち、徴税率が非常に悪く、昭和十九年度分で六六・五八%である。(もっともよい知念地区で八五・九七%、もっとも悪い前原地区で四〇・九三%である)



(最も古いかまぼこ校舎の一つ・壺屋小学校にて)

徴税率の悪いおもな理由の一つは、自分の子どもが学校にいらっているばあいは、納税の意欲をおこすが、子どもがいなかったり、自分の子どもが現在学校にあがっていないばあいに、納税意欲がおとろえることである。

理由の第二は、実際に徴税にあたる者が、市の吏員で、普通の税と一緒に徴税事務をおこなうことである。すなわち、これらの徴税者は税金を少しでも納めさせようと勧誘するばあいに、税金の滞納が直接に自分の月給にひびいてくる普通の税のほうをはやく納めさせるようにし、教育税はあとまわしにする傾向がある。このことは多くの先生がたや教育委員からきいたところであるが、教育税の徴集率が特に低いことは、ここに原因があるのかもしれない。このように教育税の収納が低いことは、後に述べるように月謝をもってまかなう幼稚園には直接ひびいてこないが、間接には幼稚園教育を圧迫している。

すなわち、幼稚園の支出を保育料だけでもかなうことは困難である。たとえば那覇区教育委員会の昭和三十年(千九百五十五年)度予算をみると、次表のようになっており、幼稚園収入は日本円で二百九十六万四千円がみ

	歳入内訳	%
1	政府補助金	80.94
2	市補助金	2.84
3	教育税	12.50
4	幼稚園収入	1.90
5	雑収入	0.60
6	過年度収入	1.74
7	その他	0.00

こまれているが、歳出をみると、四百七十六万二千円となっており、全体の三・〇六%を占めている。これは他の区も同様で、幼稚園のあるところは、こも保育料以外から補っている。この金額は、ごくわずかなところもあるが、小祿区のように二十八万円の収入にたいて、八十三万を支出するところもある。

沖繩の対日感情 現在、沖繩は潜在的に日本領土であるが、統治権はアメリカ合衆国にある。しかし、一日でも早く日本に復帰したいというのが、島民の心からの願いである。

沖繩の人人の対日感情を知るために終戦以前のことに少しふれてみると、民族的には、沖繩の人々がどのような地に住みついていたかは——、南方の人が日本にわたる途中

に住みついたという説もあれば、日本からやって来たという説もあり——、種々異説がある。しかし、文化は、言葉をはじめとして、日本による影響がきわめて大きい。もっとも、沖繩列島のなかでも、久米島のように、支那の影響が大きく、これをほこりとしてきたところもある。

歴史的には隣天をもつて有史時代のはじまりとし、それ以前と分けているが、この隣天を源為朝の子ともする説もあって、日本との親近感が深い。支那にたいして、陶磁器その他のものを得るために、冊封していたが、これはそのようにすることによって利益があるから、自発的にしていたのである。また支那へ留学生がよく行っている。日本とは、慶長の役以後、内地往來がしげくなり、和風の影響がいちじるしくなった。島津藩は、支那の産物を得たために琉球を独立国として扱い、琉球はまたこれを利用して、支那、南方、日本と交通していた。この間に、支那、日本、南方の文化を吸収したが、特に日本の文化がいちじるしくしみこんだ。しかし、独立国としての種々の特有な文化も発達し、現在におよんでいる。

廃藩置県後は沖繩人による知事はでなかったが、沖繩の人人は日本の一府県として、他府県人と同様な自覚をもっていた。

以上が大体戦前の対日関係のあらすじであるが、終戦後は、ごく一時ジャポネイズということが生じるなど、日本人にたいする反感がおこったこともある。しかし、これはごくわずかな期間であって、米軍のその後の行動により、アメリカ人にたいする反感が漸次つゆり、日本人としての自覚がきわめて高くなった。現在、日本復帰は沖繩の人人の至烈な願望であるが、筆者は公式にこれを口にする者には、ごく少ししかあわなかった。幼稚園教育においても、幼稚園の先生は、日本の幼稚園が、どのようにやっているかに注意し、筆者に日本の幼稚園の現状を熱心に質問された。またそれとなく幼児に日本人としての自覚をもたせようとしている由である。日の丸の旗を立てることは現在許されていないが、これが許されたときには、非常によることと立てたということもきかされた。以上対日本関係についてややくわしく述べたが、沖繩の幼児教育を考えると、この対日本関係はひろい意味で基礎をなすものとしてなお

ざりにできないものである。対アメリカ関係については、これを割愛しよう。

沖繩の幼児 沖繩の幼児は、沖繩の民族の複雑性をおもわせ、風貌もまちまちであるが、一般に目が大きく、耳も大きく、可愛い顔をしている。戸外でも帽子をかぶる幼児はなく、遊びは日本の子どもと大体同じである。

帽子をかぶらないのは、衛生に無関心のためというよりも帽子をかぶると頭がむせるためである。ゆえに、いい家庭の子どもも帽子をかぶらないがこれは南方共通の現象である。

また日本の幼児とちがって、遊びにおもちゃを使うことが少ない。那覇市でもおもちゃ屋は非常に少なく、筆者はしばしばおもちゃ屋の前を通ったが、あまり客が入っていないかった。いなかでは、多くの子どもがはだして遊んでいる。暑いために、比較的夜おそくまで起きている。

絵は原色が多く、一般に巧みである。絵の感じは非常に明るい。手工はそれほどでもない。

一般に出生率はきわめて高い。混血児も若干みたが、内地ほどにめだたず、深刻な問題にはなっていない。混血児のかずは、六歳児百三名、七歳児百二十名、八歳児百二名、九

歳児四十八名、十歳児十一名、十一歳児二名であり、七歳児を絶頂にして混血児の幼児のかずは次第に少なくなりつつある。

幼児の知能についてはよくわからないが、那覇市内の幼稚園児に、筆者の団体知能検査を二回にわたってこころみたところ、受検態度は東京都内の幼稚園と同様で非常に検査しやすく、知能値の平均もやや高かった。

沖繩の教員 多くの教員が戦争によって戦死したし、戦後のインフレによって教職から離脱した人も多かったため、教員がた然なくなり、教員訓練学校と、文教学校(八・四制の上)に一年履修)で、教員の短期養成がおこなわれた。現在はここを出た教員の数が全体の三分の一以上を占めている。このほか、旧師範学校出身者があり、これらの人人が責任的な地位を占めており、現在は琉球大学の出身者が教職につきつつある。

現在小中高の教諭二千三百三十七名のうち一級普通免許状をもった者は、わずかに九名にすぎず、教員の資質の向上は三スローガンの一つであるが、文教学校や教員訓練学校出身の短期養成教員の向上が大きな問題になっている。幼稚園の教諭の大部分はここを出た

人である。

なお、教員の組織として教職員会があるが、これは組合ではない。教員の学働組合は現在でもアメリカが許さないので、やむをえず教職員会を組織しているのである。しかしこの会の共済的な方面の活躍は大きく、筆者はむしろやりすぎる面もあると思つたくらいである。教職員会における幼稚園教諭の待遇は他の教員と全然変わらない。

教員は、前歴が教職以外の者も多い。一般には商売をしてもよくなく、軍作業をしてもよくないからというので、次第に教員になりたく思うものが多くなつてきつつある。すなわち、現在の沖繩では、教員は比較的にめぐまれた職業であるが、教員のなかでは、幼稚園教諭は、一万円程度の月給であつて、給料の点からいっても、法的うらづけの点からいっても、はなはだしくめぐまれていない。けだし小学校教諭の最低が九千三百六十円、高等学校教諭の最高が二万二千七百五十円(校長最高三万二千二百五十円)である。

また夫婦で教員をしている者が多い。これは終戦後一家中の者がはたらいた名(こりである。産給は四十日である。(次号につづく)